関西大学『社会学部紀要』第24巻第2号，1993，pp. 47-74　　ISSN 0278-6817

熟年の教育「哲学」論

川　野　　広

An Essay on the "Philosophy" of Education by the Aged

Hiroshi KAWANO

Abstract

It is a matter of common knowledge that education, in paricular, higher education at the university level, has faced many problems awaiting solutions in Japan today. To answer the questions presented by such problems, it might be quite necessary to examine in detail the status quo of university education, for example, study methods, seminars, lectures, and so on. Furthermore, it should be noted that the implication that many of the defects of higher education might be attributed to faults in the society as a whole can no longer be avoided.

This study is both an attempt to analyze the issues mentioned above and a search for some effective means of solving these problems.

Key Words: seminar, lecture, *juku* (private tutoring school) and *karaoke* (singing to taped accompaniment), primary, secondary education and higher education, entrance examination and employment, lifetime learning, education and study, professional study and interdisciplinary study, ideology and religion

抄　録

日本の教育，とりわけ，高等教育に問題が多いのは周知の事実である。この問題に答えるには，大学教育にメスをあて，研究，講義，演習などの実情を詳細に検討することが必須である。さらに進んで，高等教育にみられる欠陥の多くは，社会全般にも帰せられるべき点があるのではないかを吟味することは，今や，避けて通れない。

この小論は，こうした問題に焦点をあて，さらに，その有効な解決の糸口を探ろうとするものである。

キーワード：演習，講義，塾とカラオケ，初・中等教育と高等教育，入試と就職，生涯学習，教育と研究，専門研究と学際研究，思想と宗教

関西大学『社会学部紀要』第24巻第2号

目　　次

まえがき
ゼミ風景
　——ゼミを本音で言える場に——
講義と私語
　——教師と学生は坊主と亡霊の関係——
塾とカラオケ
　——いずれも「諸悪の根源」——
初・中等教育と高等教育
　——いずれも罪があるが，後の方が罪が重い——
入試と縁故採用
　——学校の入口のパイプの栓は固すぎるが，出口のはジャジャ漏れ
　　そして，社会の入口のは開きっぱなし——
生涯学習と一流現役
　——一流現役こそ「生涯学習」すべきである——
教育と研究
　——天は二物を与えず——
専門と学際
　——学際なくして，専門はない；専門なくして，学際はない——
思想と宗教
　——社会主義思想は死んではならないが，それだけでは幸せにつながらない——

▷ まえがき

この雑文は，教育に関して，思いつくままに，書き溜めたものである。
テーマの間で，いくつかの共通項目があるが，扱う視点がそれぞれ若干異なることを断っておきたい。なお，文中，「彼」とあるのは，例外を除いて，著者本人である。

▷ ゼミ風景 ——ゼミを本音でいえる場に——

新規学卒者の求人像を，「全人格的に有為な人材」[日本経済新聞・社説] だと強調しているのとは裏腹に，「要領のよい」，「飲み込みの速い」，「現実対応型」のイエスマンを好んで採用しているのが実業界の姿である。彼流にいえば，「思想的にはもちろんのこと，哲学 [教養と言い直してもよい] に汚染されていない [教養がないという意味]」学生を求めているようである。「価値観も固定しないコンピューター的宇宙機械人」がやたらと多いと嘆く向きもあるが，これは，なにも，「新人類」[この「いっぱからげ」の表現には問題もあるが] の責任だけではなく，彼らは，そうした社会の要求に素直に応じている，つまり，社会の産物なのである。

こうした「川下」の実業界の虚構が，「川上」の教育界に逆流し，若年層の鋭敏な神経を触んでいる実態をどうしても見逃しておくわけにはいかない。徐々にでもよい，微々たる効果でもよい，まずは，「川上」の教育界が浄化され，その清流で「川下」の実業界を浄化していく以外に手はない。

「川上」の教育界を，建て前と本音とを使い分ける訓練の場にはしたくない。教師と学生との間で，「本音を言わない，本音を書かない」，「本気で答えない，本気で読まない」の応酬に終わ

りがちな建て前社会を追放すること，これが彼のいう「浄化」なのである。

彼の専門講座は，「労務管理論」と「労働経済論」とであるが，彼は，常々，彼の講義の方針をこう位置付けている。「労働問題」を登山口として，「人間山脈」を学生ともども登攀し，人間性を探険するのだと。といって，「ザイルの使い方はこうだ」とか，「ピッケルは……」といった登山技法を細々と授けるとか，強化訓練に明け暮れるといったことは，全然考えていない。そんなことは，登山者が，それぞれに工夫し，考えればよいことだと思っている。ただ，羅針盤だけは与えておきたい。「人間社会は，所詮，『不完全』な人間の集まりだから，最善の道は選べないが，与えられた条件のもとで，嘘は言わない，本気で，全力投球で，次善の道を探っていくべきである」という羅針盤である。さまざまな人間活動の一つの局面である「労働」という切り口を通じて，「物の考え方」というより，「考えるという能力」を身に付けさせることが，教育の真髄だと考えている。

彼は，ここ二，三年のところ，「余暇と所得との選好」というテーマで，ゼミを開講しているが，「余暇」の言葉につられて，彼のゼミをレジャーランドとみてとったのか，集まりもよい。そうはいっても，これまでなんとなく過ごしてきた「余暇」を，改めて，学問の対象にして，研究しようというのだから，そう呑気にもやってられないはずだ。

労働と余暇とは，人間生活の両面であり，光と影との関係ともいえる。一般的には，職場で，人間性を喪失する労働をやらされて，生活の糧である所得を得，その労働時間の一部を割いて，得られるはずの所得の一部を放棄するかわりに，手に入れた余暇を活用して，家庭で人間性を取り戻すということになっている。が，こうした労働と余暇との間で，人間性が相殺され，「プラスマイナス零」になるだけでは，人間性の発展というか，充実といったものは，到底，期待できないであろう。そこで，これまで，労働の影に隠れて，肩身の狭い思いをしていた余暇を前面に引き出し，これに照明を当て，その意義を尋ね，その活性化を検討して，逆に，労働のあり方を問い直し，その中にも働き甲斐や生き甲斐をも見つけていく努力をしなければならない。

彼のゼミの研修では，余暇の活性化の問題を，「政府の行政的観点」,「企業の労務管理的観点」,「労働組合運動展開の観点」,「労働者生活の観点」,「余暇産業の観点」と，主体別に分けて，検討の切り口とし，「卒業論文作成の手引き」を用意して，勉強させている。余暇と所得との選好のあり方は，所得水準に左右されるが，なによりも，生活に対する価値観の影響が大きい。このゼミの場で，ゼミ生それぞれの価値観を，このテーマを手掛かりにして，どう表現し，最終的に卒業論文にどう反映させるかをみるのが，彼の教師としての楽しみの一つである。

▷　講義と私語　――教師と学生とは坊主と亡霊との間柄――

彼の講義の時間は，比較的雑談が少ないという学生間での評判である。それでも，時々教室の一隅から，潮騒のような私語が伝わってくる。それは，お盆の時など，お寺の本堂で，坊主がお経を唱えていると，それに応じてか，唆されてか，墓石の底で深く眠っていた亡霊が目を醒まし

て，なんやかや呟き出すのに似ている。眠たいのに，わめきちらされて，煩いからなのか，それとも，お経の調子や言葉が有難くもおかしくもないために，文句を言っているのか，そこのところが，今一つはっきりしない。ただ眠たくて，お経に「聞く耳持たない」のでは，話にもならないが，お経の内容が，亡霊の冥福を祈るのにふさわしくないというのであれば，坊主の方がお経に工夫を施す必要があるだろう。そこで，坊主は，ぶつぶつ文句を言っていた亡霊のどれかに近寄って，何を言ったのか問いかけてみることになる。ところが，大概の亡霊は，即座に，「済みません」と逃げようとする。そこで，坊主は文句を言うことになる。「謝れとは言ってはいない。何を呟いたのかを尋ねているのだ」。その亡霊は，重ねて，「済みません」と逃げ切ろうとする。これに構わず，坊主は，問いつめる「お経の内容と関係があるのか」。亡霊は沈黙。坊主，執拗に返答を迫る。たまりかねた亡霊は言う「関係ありません」。とうとう坊主は怒る。

「お経が有難くないというなら，反省もしようし，工夫もしよう。ところがだ，関係ないという。では，一体，何をブツブツ言っていたのか。眠いから，黙れとでも言うのか。それは，お門違いというものだ。俺は，君達の御両親から君達にお経を唱えてくれと，御布施を頂いてやっているのだ。黙れと言うなら，それは，いわば，営業妨害というものだ。それに，君達も，わざわざ，親に金を出して貰ってまでして，墓場のような教室にやってくることもなかろう。娑婆で，アルバイトをするなり，遊び惚けるのもよし，眠りこけるのもよいだろう。けれど，ここは墓地なんだぜ。やってきたからには，一時間かそこらは，我慢して，霊の眼を見開いて，お経に耳を傾ける約束になっているのだ。繰り返すまでもなく，君達の最愛の親族の方々から，君達の霊を慰めるよう，呉々もよろしく頼まれているのだからな。それに，ちょっと我慢すれば，授業終了という娑婆への復活の鐘が鳴るのだから，それまでの辛抱だ」

まあ，こういった教室風景をどう見るか。坊主は，さらに続けて，こう付け加える。

「なにも，君達の霊が，娑婆の坊主に謝ることはないのだ。それよりも，せっかくの神聖な教室を墓場のような生気のない場にしたのは，教師にも，学生にも，つまり，坊主も，亡霊もいずれもの責任なのだ。教師と学生との関係の場を，もっと生気の通い合う，活気のある娑婆の場にしなければならないのだ」

坊主は続けて言う。

「それに，なによりも，無条件に，『済みません』と簡単に降参してしまうのは，別の意味で，重大問題でもある。外国の例を引いて悪いが，とりわけ，イスラム系の国々では，『済みません』という言葉は，禁句になっている。なぜなら，そのように謝った以上は，その代償を具体的，つまり金銭で払わなければならないのだ。これは，貧しい人々には，致命傷に近い。だから，例えば，現地の日本人家庭で働いているメードなんか，安物の茶碗を壊しても，あたかも，自然現象かそれとも，神の啓示にでもよるかのように，『アラーの神の思し召しによって，茶碗が落ちて，壊れた』といった調子で絶対に謝らない。日本の主婦なんか，『済みません』と一言，謝ればいいのに，憎らしいったらありゃしないと不機嫌になる。大体，日本人は，『スマイル』，それに，

『スミマセン』を多発しすぎる」と脱線までして説教してしまって，「済みません」と謝る羽目になる。つい，彼にも，日本人の悪い癖が出てしまう。

▷ 塾とカラオケ ——いずれも「諸悪の根源」——

ここのところ，カラオケブームは一向に下火にならない。パチンコと並んで，日本の超ロングベスト「文化」といえよう。日本人が音楽感覚にとくに敏感な種族であるという証しもはっきりしない。それに，日本人は，人前を憚る習性も強いとみられている。それがどうだ。老若男女，都心，僻地を問わず，この盛行は鳴り止まず，海外の日本人基地にまで，飛び火している。こうまで受けると，これを「ナリワイ」にする輩が族生するのは理の当然といわざるをえない。パチンコのロングセラーは解るような気がする。日本人気質と生活環境とにかなりマッチしたゲームだということである。時間短縮や余暇の拡大とか急に押しつけられても，さしずめ，その使い道に困ってしまう。今まで，生活のためにアクセク働かされてきたのだ。なんやかや動いていないと気が済まなくなるような習性を身に付けさされたところへ，金持国になったからといって，これからは「生活大国」にするんだとかいって，ゆっくり遊びなさいとタイムボーナスを頂いたようなものだ。その使い場に困ってしまって，銀行に預けようとしても，空気を預けるようなもので，むろん，利子も付かない。といって，冷蔵庫にしまっておいても，腐りはしないが，後からまとめて使うわけにもいかない。むろん，本を読む面倒臭い習性もない。旅行に出ても，娯楽施設でもなければ，忽ち，退屈してしまう。娯楽施設を利用する費用も馬鹿にならない。その点，パチンコは時間潰しにはもってこいだ。機械を動かすリズム感もなかなかよい。チュウリップでも開けば，最高の快感を味わえるし，多少の賭博精神を満たすこともできる。リスクといっても，たちまちのうちに，小一万もすってしまうマニアは別にして，まあまあのところで済ますこともできるといったことも，しがないサラリーマンの懐具合とも相談できるというものである——とはいうものの，大の男が，会社帰りや休日などに，ひねもす，ジャラジャラやってる姿はあまりいただけないが——。

そこへもっていくと，カラオケにどんな御利益（ゴリヤク）があるのだろう。そこのところが今一つはっきりしないのだ。昔は，音痴だと思い込んだり，他人（ヒト）にそう言われたりすると，とりわけ，女性は人前で声を出すのも憚った。声の美しい女性は心も美しいと錯覚された。他面，声が悪いと，その人に悪魔が住みついているかのように，忌み嫌われたし，本人も世間を憚った。が，どうだろう。カラオケブームとなると，猫も杓子も声帯を震わせて憚らない。だいたいが，人，とりわけ，女性が唄を歌っている姿，とくに，クラシックを正攻法で歌っているどんな美人の顔もどうもいただけないものだ。それがどうだ。どいつもこいつも，どこでも，いつでも，がなりたてはじめたのだ。いや，真相はそうではない。特定の情報機器の揃ったボックス内で，歌うのが流儀として定着してしまった。彼はいつか，ゼミ旅行かなんかで，大部屋で寛いだとき，時間潰しもあり，なにか歌えと学生にせがんだが，誰も名乗り出ないので，彼が一つやったが，誰もつい

てこないで，座は白けるばかり。つまるところ，こういうことだ。情報機器が備っていなければならない。歌詞が字幕に出なければならない。バックミュージックが鳴らなければならない。本人はマイクを握らなければならない。そうして，聞き手がいなければならない——もっとも，たいていの者は，他人(ヒト)のものなんか聞いてはいないのだが——。こういったお膳立てがなければ，彼らは乗ってこないのだ。

ところで，その唄といえば，新しいものであればあるほどよい。彼が数年前に流行ったのをやったとき，何十年前のですかと学生から冷やかされた。彼らの歌っているのを聞いていると，どれもこれも一律にが鳴りたてているようだが，彼らは聞いていないようで聞いてもいるもので，それなりに優劣が区別できているらしい。彼には，旋律も音感もあらばこその歌い方にみえる。ただ，エネルギーの発散方法の一つであることだけは間違いない。それに，リズムのスピード感も味わえる。なにしろ，日毎に発表される新作は，どれも変わり映えしないようだが，リズムのスピードはアップの一途を辿っていることは確かだ。ともかく，新作，新作と前のめりになって，過去のものは，余程のものでないと，見向きもされない。彼らは，こうして，流行の新人と一緒に流行の先端を突っ走る気分を味わう一種のナルシシズムに陥っていたいのだ。そうだ。そういうナルシシズムの常習犯なのだ。自分一人で自作自演はできないが，こうしたお膳立てがあれば，こうした形ででも，自己のアイデンティティを出したいのだ。学業やスポーツで，アイデンティティを出すのはシンドイので。では，サラリーマンの場合はどうか。彼らもビジネスの世界で，仕事で，自己を立証したいが，この管理社会の絆に自縄自縛の身ではどうにもならない。といって，楽器をいじるのは，時間も金もかかるし，それに，楽譜も勉強しなければならず，それはそれは大変だ。結局，カラオケに落ち着くということだ——もちろん，ゴルフやマージャンの手もある。が，ゴルフは，日本では，コスト的にいって，自前ではまだ無理だし，マージャンとなると，勝負がドギツイし，大きくスッテしまって家計にひびくこともざらにあるし，上司にオベンチャラしようとしても，負け方によほど工夫しないとすぐバレル。だいいち，深夜に及び，不健康的でもある——。では，社長や重役の場合はどうか。彼らには彼らなりのフラストレーションもある。それに，自分たちは芸能感覚が欠落しているのではないかと内心悩んでいるところもある。こうしたさい，カラオケは格好の吐け場である。芸の試しどころになる。ただし，部下たち，従業員の前だけに限られる。家族の前だけは絶対にいけない。コテンパンにやられるからである。カラオケのよいところは，採点されない——最近，金をいれれば，スコアが出るのもあるようだが——ことである。もし，これが一般化すれば，途端に下火になること請け合いである。他人(ヒト)のは，外声音だけを客観的に聞けるから，上手，下手がハッキリ分るが，自分のは，幸いにも，外声音と内声音とが微妙にバイブレートして，深みと余韻が加わったようで，自分だけには心地よく聞こえるから不思議である。丁度，芸者が客前で自信をつけるため，水銀膜の厚い「自惚れ鏡」を覗き込むようなものである。そこのところを部下たちは逃さない。このさいとばかり，誉めちぎるからたまらない。それも，仕事の一部というより，幸運を摑む絶好の機会で

もある。仕事で認められる場合のコストに比べて，気楽で，格段に安くつく。

また，こうした場で，お世辞とも思わせず，自尊心をくすぐることにかけては，天才的な才能を持ち合わせている者がいるのも，重役たちにとっては，好都合である。こうした方面での天才ほど，仕事はイマイチなのだが，仕事が多少でもできれば，重役の椅子も手繰りよせやすいのだ。そこまではいけなくとも，お偉方に名前や顔は一遍で覚えられる。

さて，オバタリヤンの場合はどうか。いつもあくせく働き，帰宅が遅いのに，出世も覚束ない亭主と塾やなんやと金が掛かるわりに出来の悪い子供たちにウンザリして，気晴らしにカルチャーセンターやなにかに出掛け，その帰りに，カラオケボックスで，黄色い嬌声を上げては，お互い褒め合う麗しい光景が見られるというものである。

こうして，一億総音痴が巷を横行し，一億国民が総迷惑しているのである。その証拠とでもいうのか，一曲歌うごとに，金を払わされる。普通なら，多少のギャラを貰えるのに。つまり，他人（ヒト）に無理して聞かせた迷惑料なのだ。それなら，金は聞かせた相手に払うのが筋なのだが，歌ったり，聞かせたりするのは，お互い様だから，それは帳消しにして，結局は，場所，設備などの提供者の懐に入る仕組みになっているのである。序でにいえば，その大部分は，当然，目的税などの形で召し上げて，周辺の住民の福祉かなにかに還元されるべきであろう。もっとも，最近，防音規制などの法制化を試みる自治体も現れてきているようである。

さて，塾の関係の問題に移りたい。

大学生の「講義」離れは著しい。こうした状況のなかで，「講義節」を聞くのも，聞かせるのも，お互い，まことにシンドイ話だ。ただ，この場合，教師にとっての救いは，退屈な講義をしても，詰まらない講義をしても，聞き手から授業料というギャラを貰えるのだ。しかも，講義に出ない連中からも，当然，貰えるのだ。当然という意味は，彼らは，退屈な講義を聞かされずに済んだのだから，その御利益（ゴリヤク）料として，授業料を払う義務が生じたのだとも解釈できる。つまり，なんとか，卒業できれば，講義を聞く苦痛もなしに，お目当ての卒業証書を手に入れることができたのだから。大学の講義とカラオケとの違いは，カラオケをやると，迷惑料を払わされるが，「講義節」を唸れば，ともかく，給料が貰えるのだ。ここに，教育産業の有難いところがある。

ところで，今や，勉強したい者もそうでない者も，大袈裟にいえば，「生きとし生けるもの」は，あげて，進学競争にブチ込まれているのだ。

丁度，歌いたい者も歌いたくない者も，歌いたくても歌えない者も，あげて，カラオケの世界へ押しこまれ，呑まれつつあるように。一次会が終われば，二次会はカラオケと，大体，相場が決まっているのだ。用件にかこつけて，逃げ出そうとしても，「人非人」のように蔑まれる。そうして，歌いたくても歌えない者，歌いたくない者も，泣きの涙でやらされるのだ。これと同断で，今や，勉強のできる者もできない者も，また，能力がない者というより，そういう方面に向かない者までも，いつ，どこで使えるかもわからないような外国語の単語を暗記させられ，大昔の人物名や地球の果ての地名まで覚えさせられ，平和主義者には苦手の受験地獄に投げこまれる

のだ。どうして，そういうことになったのだろう。苦手な者が無理して唄を覚えても，たいして目立たないのだ。それと同様に，多少，勉強して，ちょっとした学校へ入学しても，それでどうということもないのだ。ただ，人並に扱われるのがオチだ。そのための有形，無形の投資といったら，大変なものだ。入学料金や授業料などの金銭的出費もさることながら，生涯で一番大切な青春の四年間を勉強する気はサラサラないのに，「格子なき牢獄」に囲われるのは，あったら青春の無駄使いであり，ほくそ笑むのは，塾を含む学校産業だけだ。だからといって，日本文化は一歩たりとも進歩してないのだ。とかく，生活には無駄が付き物ではある。それにしても，こうした形での教育の無駄は，文字通りの無駄としかいいようがない。

ところで，カラオケブームといっても，朝も昼ものべつ幕無しやっているわけではない。まあ，二次会でのお慰め，座興，余興というところだ。それにくらべ，教育ブームはそうはいかない。昔は，小学校の義務教育で，「読み書き算盤」を習わされた。これは，日本経済にとって，大変な収穫だった。「文盲率」を一掃し，日本経済発展のための布石となったことは，海外を問わず，大方の認めるところである。が，そこだけ辛抱すれば，後は，自由な世界に羽ばたけた。勉強したい者は，百姓出であろうと，町人出であろうと，苦学力行して，最高学府の門を叩き，学者にもなれたし，六法全書に首を突っ込んで猛勉し，高級官僚に登用される道も開かれ，さらには，政界に打って出，権力の座に就くこともできた。他方，勉強が苦手な者や嫌いな者や，それに，気の毒にも，家庭的に経済事情が許さない——現在ほど，簡単にアルバイトの口は見つからなかった——者などには，そんな回り道をしなくても，手っ取り早く，どこかの商店に丁稚奉公し，算盤片手に，大福帳と首っ引きしておれば，番頭へ，さらには，暖簾分けしてもらって，一戸を構え，それなりの商いもでき，ひとかどの身上も築けたものである。序でにいっておくと，この権力と金力とは，屢々，癒着はしたが，どちらかが，他方も兼ねることはなかったのである。この二分法が現在まで残っているのは，米英アングロサクソン系の国とは違ったところであり，日本にとってせめてもの救いである。それはそれとして，ともかく，こうして，それぞれの道があったのだ。まあ，それぞれが，それなりに，納得のうえ，そうした道を選び，選ばされたとみることができる。ところがどうだ。今は，こうした社会的合意が成立していないのだ。とりわけ，親と子との間，教師と生徒との間，つまり，社会と個人との間に，合意が欠落しているのだ。嫌だ，嫌だと逃げ回る子を捕まえて，口を抉じ開けて，無理やり，栄養剤と称して，押し込むのだ。これでは，栄養になるはずのものも，裏目に出てしまう。勉強が嫌だという子や親からの遺伝で頭の悪い子を，せめて，世間並みにしてやりたいという親心で，塾などに通わせ，なおさら，勉強嫌いにさせている。もちろん，「食わず嫌い」ということはある。しかし，ある程度までさせてみて——大体，小学校や中学校の義務教育の段階で，あらましの見当がつく——その段階で，聖書流にいえば，羊と山羊とに仕分けるのもよいかもしれない。人には，「向き不向き」があるものだ。向きたくないところへ向かせようとするのが一番いけない。

昔から，勉強についていけない者は退学したり，意欲を示しても，不幸にして，受験に失敗し

たり，いろいろあって，彼らは消えていき，消されていった。社会でもそうだった。

弱肉強食の世界は，今と少しも変わらない。が，変わっているところが一つある。昔は，こうして消えたり，消されたりした者は，亡霊と化して，社会や組織に恨みつらみをいう者はほとんどなかった。諦めがあった。というのは，どの道を選ぶにしても，親からも教師からも，要するに，社会から「こうせよ」と強制されることがなかったので，それなりの得心ができたのではないか。もちろん，お前は女だからとか，経済事情が許さないからとかの理由で，「勉強するな，学校へ行くな」と強制されたものもいたことは確かだ。しかし，こうした不幸な者の中には，その後，女性開放運動や思想運動に乗り出し，社会改革に一石を投じた者も出たのである。

ところがどうだ。現在では，無理やり，そぐわないことをやらされ，そこから脱落し，排除させられた者たちの一部は，現体制の矛盾に真向から歯向かうのならともかくも，もって行き場がないかのように，暴力的集団として，非行的集団としてあるいは暴走族として，なんの関係もない「無辜の民」に大迷惑をかけるような程度の低い「子供じみた反逆」をくり返しているのである。

こうして，身近で，手近な親や教師や市民に手当り次第，あたり散らかす程度の，無気力で，非生産的な抵抗では，その背後に厳存する現体制の矛盾も大人の世界の隠されたいやらしさも摘出されないまま，かえって，その居座りに口実を与えているにすぎないのである。

確かに，人間の才能や好み，それに可能性に早い時期――先ほど，小学校や中学校といったが，これは，どこまでも，一つの目安にすぎない――から見当を付けたり，見切りを付けたりすることには問題がある。その点，もっともっと可能性をマ探る時間と場所がほしい。現代教育システムに与えられた一大課題である。

いな，システムというハードの問題もさることながら，むしろ，ソフト面が問題である。二つの問題を指摘したい。

一つは，よい意味でのハングリー精神または好奇心が失われたことである。勉強したくない，辛いことはしたくない，なにも面白くないなど，豊富な物質に取り囲まれながら，精神的には，「ないないずくし」族になっているのである。つまり，健全な食欲を失った者があれこれ宛てがわれ，食い散らかして，飽食状態に陥り，消化不良をおこし，ハングリー精神を喪失したのである。「豊富の中の貧困」の状態なのである。では，何故，「健全な食欲」を失ったのか。それは，もう一つのことと関連する。

もう一つのこととは，これまでの目標が矮小化してしまい，ついにその目標すら失ってしまったことである。それには，情報機器の発達とジャーナリズムの活躍との影響が大きい。今も昔も悪い奴もおれば，善い者もいる。世相が悪化の一途を辿り，終末が近いという御託宣もあるが，その証も今のところない。ただ，現代になるほど，科学の発達もあり，悪事は精緻化され，大型化し，スピードアップした。それに，それらを報道するジャーナリズムが素人の目にも子供の頭でも判るように，大仰に，マンガチックに伝えるようになった効果は馬鹿にならない。すべての

権威も，威厳も，崇高ささえ，矮小化され，美も善も平均化され，偉大と言われた英雄も小市民化されたのである。無条件に聖域化された神秘のベールが剝がされたことは，それなりによいことではある。しかし，すべてが均等化され，平均化され「すぎた」。善も悪も，利己も利他も相対化され，ごっちゃまぜにされたのである。

では，昔の時代の教育を手放しで褒められるか。もちろん，否である。高等教育を受けた少数のエリートは，なるほど，政治や経済，さらには，哲学や宗教まで学んで，今日の輝かしい座を占めている者も多い。ところがである。そういう連中の大半は，地位や名誉や保身にあくせくし，「子孫に美田を遺したい」のか，金銭に拘りすぎて，バブルの崩壊，汚辱その他，馬脚を現している始末である。また，無学ながらも，一代で身上を築いた連中の大半は，守銭奴となりはて，成金根性丸出しで，「教養に邪魔されず」に，大手を振って，世間を闊歩している有様である。どいつもこいつもなってない。こうした連中がオピニオン・リーダーの座を占める限り，「百の説法屁一つ」となり，後輩には，「馬の耳に念仏」なのも無理はない。彼らに要求されることはただ一つ，「生涯学習」の必要があるということである。昔，高等教育を受けたからといって安心はできない。その実績を踏まえて，日々，研鑽することである。無学だった者は，その後の社会勉強を通じて，その穴を埋めていくことである。仏典や聖書の古典がすでに明確に啓示した愛や慈悲や思いやりや利他の精神の完成は，一生の課題であり，ちょっとでも気を許すと，「元の木阿弥」になる危険性が高いのである。所詮，人間は不完全な動物ではあるが，完全を目指して努力する動物でもある。そこでは，教師も生徒もない。すべてが「生涯学習」する「生涯学生」であるはずなのである。

「生涯学習」は，学齢期に勉強できなかった者たちだけの課題ではないことを銘記すべきである。

塾やカラオケ・ボックスの族生は，他でもない，社会それ自身の要請なのである。こうして，塾で受験技術を器用に身に付けて，有名大学，著名企業と，世俗的に出世していくサラリーマンとカラオケ・ボックスで，マイク片手に，スター気取りで，恰好を付けて，世渡りしていくサラリーマンとが大量生産されていく。「ゼミ風景」のところで述べたように，大新聞の社説が，「企業は『全人格的に有為な人材』を求めている」と報じたのとは，ほど遠い状態である。今の社会に，釈迦やキリストそれに孔子などのような，文字通り，「全人格的に有為な人材」——もっとも，こうした古典的な人材が，現代社会で，文字通り，「有為」であるかは，大いに疑問ではあるが——が現れたとしたら，忽ち，持て余してしまうであろう。今の複雑で，混迷を極めた社会の救世主として，こうした人物が数人現れてもどうにもならない。また，救世主といったものではなく，たとえば，民間企業のオ偉方だったらどうだろう。おそらく，部下にはピンとこない「カッタルイ」指示しかできなかったであろう。一般従業員だったらどうだろう。おそらく能率の悪い，気の利かない従業員であったろう。いずれにしても，落第生だろう。しかし，このように，汚濁しきった社会を「世直し」するには，全人類がこうした人物に，一歩でも二歩でも近ずく努力をする以外に手がないのである。ところが，そういうことになれば，おそらく，企業などの組

織全体が，今日的な意味での効率性や生産性はガタ落ちするであろう。が，およそ，非文化的，非人間的な方法で利潤を稼ぎまくるよりは，むしろよいのではないか。とりわけ，経済的，物質的繁栄の頂点に立つ日本においては。今，問題になっている「メセナ」や「冠講座」がいい例である。およそ，人間性や芸術性とは縁のない手段で，従業員を働かせて稼がせた利益のほんのチョッピリで，有名芸能人を招いたり，従業員のサークル文化活動に寄付したり，大学に講座を設けたりして，売名行為をしている姿もどうかと思われる。学校教育も社会教育も，自然科学を始め，社会科学，人文科学をあげて，人間性の内奥に迫り，人類の幸せに繋げるべく，この目標に向けて，絶えず，歩み続けさせる使命を持つ。それは，抹香臭い道徳教育のようなケチッポイものではなく，壮大な人間山脈の探険なのである。既存の教育システムを含めての社会システムなどのハードのペレストロイカだけでなく，魂または精神など，ソフト面のペレストロイカが求められているのである。

こうした希望や期待とは裏腹に，塾とカラオケ・ボックスとが，相呼応して相互に深く連動している教育と音楽とをいよいよ荒廃させつつある。

一方では，塾が受験競争をエスカレートさせ，知能よりはクイズ的なコマギレ知識を，理解度よりは知覚力や頭脳の回転速度，神経の反応度などを重視し，才能，能力，努力などの顕在化した部分だけをスコア化し，偏差値を析出して，「人間たる」受験生は「輪切り」に切り刻まれ，そこから「輪切り」にされた社会人が大量生産されていく。塾教育は，教育の原点からみて，「百害あって一利なし」なのである。

他方，カラオケブームは，せっかくの音感教育を台無しにし，心音を鈍らせるばかりである。これも諸悪の根源というべきである。ギリシャ時代の余暇は，音楽と瞑想とで費やされたという——もちろん，貴族社会だけの話ではあるが——。そこに，あの絢爛たるギリシャ文化や文明が花咲いたのである。孔子様も，「礼」と音楽との教育効果を説いている。音楽こそ，心の「フルサト」を奏で上げるもので，たとえば，楽しいときに，ひとりでに，唇端にのぼってくるメロディーこそ心音であり，まさに，音楽というものであろう。今こそ，教育と音楽とを垢じみた下界から救出し，しかるべき品位を復権させる時期であろう。「ローマは一日にしてならず」である。真の教育も音楽も一夜漬けで丁稚上げられるものではないのである。また，「すべての道はローマに通じる」ように，すべての教育や音楽も人類の幸せに通じていなければならないのである。

▷　初・中等教育と高等教育　——いずれも罪があるが，後の方が重い——

教育構造の基本体系は，本来，次のようにあるべきである。

小学校，中学校の初等教育段階では，材料，方法などについて，多方面にわたって習得する時期である。その習得にあたっては，いわば，反射神経ならびに運動神経を鍛練することが必須である。頭というより体に覚えさせる，いわゆる，「頭の体操」というやつである。この段階で重

要なことは，その習得過程を楽しませる，つまり，知的遊戯の場にすべきなのである。ところが，現状はというと，この反射神経や運動神経の鍛え方が，あまりにも目まぐるしく，スピードアップして，知的興味を味わうユトリを生徒たちに与えないのである。この苛酷さは，塾によって加速されている。この構造と機能とは，そのスピードと多様性とを加えて，高等学校の中等教育段階へ持ち上げられるのである。大学受験が切迫した後期になって，この機能はフル回転して，大学の門を潜った途端，バタリと休止してしまうのである。少なくとも，大学のカリキュラムを忠実にやるなら，それまでの機能と構造に複雑性と多様性がさらに加わるはずなのだが，大部分の学生はてんでやろうとしないのである。「戦いは済んで，日は暮れた」のである。学問の戦いはこれから始まろうというのに。この大学の場では，初・中等教育段階で習得した知識や方法を踏み台にして，いわゆる，「高等教育」を習得するのである。この場合の習得方法は，それまでの延長線上であってはならない。これまでの教育は，知識の詰めこみで，Question と Answer とが同時に与えられているドリルを反復繰り返させ，機械的に暗唱させ，記憶力に裏打ちされた反射神経と運動神経とを体得させるのである。

ところが，高等教育の場では，まず，Qを自ら，案出しなければならない。そのQに対し，Aを考案しなければならない。勿論，これまでに習得した知識や方法は利用するが，Qの案出やAの考案は，自らの方法によらねばならない。それには，自然現象や社会現象に対する問題意識がなければならない。この問題意識を培うには，年齢的な経験不足を，文学，哲学，美学，宗教などを学んで，「間接体験」で補足，検証しながら，感性の深淵に触れ，知性の根源を尋ね，心性の神秘に迫る技法が求められるのである。人文科学の出番である。現在の一般の大学では，この種の分野の科目は，前期課程の一般教養課程で教わることになっている。残念ながら，この課程は，語学や体育などとゴチャマゼにされて，後期課程のための通過点として，駆け足で通り抜けられるのである。その教授方法も習得方法も，初・中等教育課程でのそれと全く変わらないのが現状である。自然科学の分野はしばらくおくとして，法律学や経済学，社会学などの後期課程の専門科目は，それぞれの専門技術を必要とするが，その十分な習得のためには，人文科学のしっかりした素養が欠かせないのである。といって，大学受験のために，無味乾燥な詰めこみ勉強をさせられてきた後の開放感もある。それに，これまでの勉強方法の惰性もある。急に，価値観のスイッチを切り替えて，「人生とはなんぞや」とか，「人はなんのために生きるか」といった深刻な問題に取り組めといっても，どだい無理な話である。

たしかに，日本の初等教育は，国の内外で評判が高い。文盲率を零にし，「読み書き算盤」を徹底的に仕込み，日本の経済発展に役立ったことも事実である。だからといって，その成功を手放しで喜んでよいものでもない。その実学の伝授方法のスピードを少し落として，情操教育に力を入れてはどうか。だからといって，釈迦やキリストそれに孔子などの聖人君子の物語や，下って，二宮尊徳などの孝子の講話をやれといっているわけではない。最近の映画の話でもよい，生きていくうえでの喜びや悲しみ，人の運命の不可思議さなど，子供の心の琴線に触れるよう，巧

みな話術と豊かな教養とで導いていけないものか。こうした教育方法を，レベルアップさせながら，中等教育課程へとつなげていくのである。となると，近頃のお粗末な教師の多い初・中等教育では，到底つとまらないであろう。なるほど，マンガ本やファミコンに夢中になっている子供らがこんな授業に退屈することは，目にみえている。こうした感受性のてんでない子にしたのは，その教師たちに責任がある。そうして，こうした子が成長して，そうした種類の教師となって，「輪廻転生」していくのである。この悪循環の環をなんとしても，断たねばならない。そうでないと，「仏作って魂入れず」式の教育で詰めこまれ，知識の正否，濃淡，多寡，大小などだけをチェックする受験に破れた者は，こうした教育を受けた者にみられる砂漠のような人間性に，敗残者としての烙印を押されて，社会の片隅におきざりにされる可能性が高い。他方，受験に成功した者は，人間性のかけらもないロボットのような大学生として，専ら，アルバイトに精を出すのである。

そうではなくて，初・中等教育で人間性を学んだ生徒は，大学受験に失敗したはしたで，成功したはしたで，その後の人生をそれなりに過ごしていけるであろう。培われた「人間性」を支えにして。とりわけ，大学教育における教養科目の習得を通じて，人間性に一層の磨きがかかるであろう。それはまた，専門分野の理解を一段と高めることにもつながるのである。なお，大学の社会科学の分野では，一般教養科目としての人文科学の科目と専門分野の科目とを，前期と後期で，分離して教えるのではなく，同時期に，並行して教えるとか，並行して教えながら，前期から後期にかけて漸次，人文科学から社会科学へ比重を移していく，いわゆる，「楔型」教育なども首肯すべき点が多い。といって，人文科学を卒業してしまうということではない。願わくば，専門科目を担当する教師が，人文科学の素養を十分弁えていることでありたい。序でに付け加えておきたい。すなわち，日本の高等教育を，アメリカのそれに見習うことを主張する者がいるが，この意見は素直には頂けない。というのは，アメリカの大学の猛勉は有名だが，初・中等教育段階での自由放任の付けが高等教育段階に回ってきているわけで，大学生で，“マイナス１”かける“マイナス１”の答えを知らない者もいるということである。ところがである。こうした基礎知識の乏しい大学生も，処世術にかけては，自分なりの論理構成を備え，防衛，攻撃いずれの手段をもフルに動員して，堂々と渡り合える者もいるというのである。アメリカの初・中等教育段階において，人文科学をふまえた人間形成の技法が，徹底的に仕込まれた結果であるとはいちがいにいえないが，アメリカのこの段階での自由放任教育を日本のとくらべれば，受験天国とでもいえそうな教育環境を背景に，箸にも棒にもかからない落ちこぼれ組が大量に産出される反面，個性と能力とを全開させ，ノーベル級にも手が届く英才が一握り輩出しているのである。また，大学の門は広く開かれてはいるが，その門をくぐった途端，専門科学のハードトレーニングが待ち構えており，高等教育修了のパスポートは容易には発行されないのである。

結論として，日本の初・中等教育では，基礎知識のハードトレーニングはそれなりに評価できるが，そのスピードを若干緩和して，その分，人間味のある，味わいのある教育を盛り込んでい

くことである。そして，高等教学への門は，ゆったりと広く開けて，理解力あり，判断力ある生徒を選別し，ある程度，アメリカ式のハードトレーニング手法を取り入れて専門教育を徹底すべきである。

▷ 入試と縁故採用 ——学校の入口のパイプの栓は固すぎ，出口のはジャジャ漏れ そして，社会の入口のは開きっぱなし——

不正な試験，とりわけ，不正入試に対する世間はなかなか煩い。ジャーナリズムがこの騒ぎに油を注いでいる。たとえ，それが三流や四流の学校でもそうなのだ。試験場は聖域とされる。それはまた，教職も聖職として祭り上げられることに通ずる。しかし，早い話が，教師自身の胸に聞いてみるがよい。大抵の者は，内心忸怩たるものがあるだろう。そうは思わないし，思いたくとも思えない連中が大部分である。小市民かマンネリサラリーマンになりすましているのであれば，まだ，罪が軽い。聖職という名前の衣の下から，ギラギラと世俗的野心をむき出しにし，守銭奴と化して，荒稼ぎするかとみれば，小手先の権謀術数を弄して，「学内政治」に首を突っ込み，「学内行政」と称して，学内規則を引っかき回すような小役人まがいの教師がゴマンといる現状である。大袈裟な表現で恐縮だが，「学校教育百年の計」を夢想する教育ロマンチストが何人いるだろうか。

まあ，それはともかくとして，教育を神聖なものとみなすことはよいことには違いない。しかし，それは，どういう観点からそうみられるべきであろうか。大抵の者は言うだろう。「それは，次世代を背負う青少年を心身ともに健全に育て，将来，社会に貢献しうる立派な人間にする仕事だから」と。その答えもまあ正解である。ところで，こうした人間形成の基礎的条件とみなされる勉学能力と意欲とを選別するための入試はなんといっても，青少年にとっての大きな関門である。ここでは，試験方法の巧拙は問わない——これを問い出すとキリがない。つまり，まったうな決着がつかないからである——が，試験を厳正にし，カンニングや不正入試の防止につとめることはよいことである。また，実際，入試の関門のパイプの栓の開閉，つまり，パイプの入口の栓の開閉は実に固いのである。ところがである。このパイプの出口，つまり，卒業のさいの出口のパイプの栓の開閉が緩いのである。ましてや，入社とかの実社会への入口のパイプといったら，多種多様で，パイプの栓の開閉の度合いも実にマチマチである。勿論，それはそれで少しも悪くはない。問題は，入試と入社のパイプの栓の有り様の落差が天と地ほどもあるということである。なるほど，入社試験も，学業成績，筆記試験，面接試験と，一応，手続きは，まともにおこなわれる。そして，結果的には，著名大学，偏差値の高い大学からの入社の数が多いのも事実である。つまりは，企業としては，できるだけ，将来，モノになる確率の高い母体から選別するほうが無難であろう。こうした大学の学生は，入社試験の結果が，たとえ，多少それほど芳しくなくても，まあまあのところであれば，ゴーサインが出るだろう。というのは，この入社試験そのものの方法も，主観的には，厳正を期して実施したにしても，種々，難点があるから，無難な

母体を信用するのである。問題は，縁故採用である。これはどうみても正当とは思われない。が，こうした「ツテ」を持っている学生は，仲間連中から羨ましがられはしても，真っ向から非難されない社会の仕組みになっているのである。いわゆる，「親の七光り」は，それと縁の遠い連中には，眩しいばかりである。たとえの話だが，総理大臣の馬鹿息子が東大へスンナリ合格したら，世間から胡散臭い目でみられるし，かりに，不正入試がばれたら，ジャーナリズムは小踊りして書き立てるし，たちまち，世間の糾弾を受けるだろう。また，たとえの話だが，名門出の馬鹿息子が名もない大学から日銀へ入社しても，世間はなにも言わないのである。いや，なにも言えない仕組みになっているのである。

繰り返しになるが，鉄管でいえば，大学入試のところのパイプの栓の開閉はしっかりしているのだが，卒業のところのパイプの栓はあっても，腐っているか，開きっぱなしになっていて，汚水でもなんでも世間へジャジャ漏れなのである。

世間に出れば，なにもかも滅茶苦茶なのだから，せめて，学校教育期間中の生活は神聖あらしめたいといった思想にでもよるのだろうか。それとも，縁故にはエンもユカリもない連中には，入試という関門を正攻法でクリアして，有名校を優秀な成績で卒業すれば，著名企業に就職できる確率は極めて高いという仕組みになっているのだから，それでよいのだというのだろうか。そうはいっても，学校教育を就職の不可欠な通過点であるという紛れもない現実からみれば，入学試験を絶対神聖視し，入社試験をそうはみないというのは，なんとしても，大きな片手落ちであるといえる。繰り返すが，学校教育機関は，就職の手段や準備機関ではなく，青少年を世間の汚濁から守り，教養，知識を身に着けさせる目的をもった自己完結的な聖職機関であると自認するのは，卒業資格が社会参入のための必須な通行手形でしかない実態を顧みるとき，アナクロニズム的な古典主義的発想と自嘲せざるをえない。

結論をいえば，こういうことである。これまでの学校入試の選別方法が主要科目の筆記試験一本槍で，その浄化方法では，純粋培養的な温室育ちのひ弱な秀才しか掬えず，「水清ければ魚住まず」の例えもあり，また，外菌への抵抗力が弱い恨みがあったことは争えない。といって，最近，学校推薦入試，スポーツ推薦，芸能推薦と，外部刺激を与えようとする試みもみられるが，下手をすると，「川上」の教育界にやたらと汚水や雑菌が注ぎ込み，折角の清水が汚染されるおそれもある。が，しかし，「川上」の水がどれほど奇麗でも，「川下」の実業界で濁流が渦巻いているようではどうにもならない。「川下」を浄化するどころか，「川上」に逆流するのが心配である。いずれにしろ，魚も住まない川も困るが，ブラックバスがうようよするような湖沼だけはなんとしてもなくさねばならない。入試のパイプの栓を少し緩めて，鮎や鱒が泳げる清水を注ぎ入れ，こうした滋養に富んだ水だけを汲み入れるよう，入社へのバルブを少し締めるよう心がけるべきであろう。

▷ 生涯学習と一流現役 ——一流現役こそ「生涯学習」すべきである——

生涯学習ブームが花盛りである。誰でも，何時でも，何処でも，学習するのは，まことに，結構なことではある。不幸にして，学齢期に勉強の機会がなかった者が，高齢期になり，その機会ができ，一念発起して，勉強することはよいことにはちがいない。何事を始めるにも，遅すぎることはないともいわれる。が，しかし，例えば，六十歳にもなってから，ワープロやパソコンをやれといわれても，それは大変なことである。もちろん，二十歳台には，こうした機器が出回わらなかったのだから，この場合の晩学はやむをえまい。ところが，基礎教育もろくに受けなかった者が，いい年になってから，古事記や万葉集を勉強しようとしても，国文法の素養が全然ないのでは，残念ながら，モノにはなりにくい。鉄は熱いうちに打てという例えもある。それぞれの時期や年齢に，それに「向き不向き」の学習内容があるはずである。少なくとも，小・中学校の義務教育段階では，反射神経や運動神経を養うといったハードトレーニングも必要である。理屈抜きの博覧強記も必要だし，また，そうして得た材料は，今後の役にも立つ。ところが，義務教育をロクスッポ受けなかった連中が，中・高等教育段階さらには実社会に出てから，ようやく物心がつき，問題意識が出てきても，その問題を展開し，なんらかの結論へ導くための作業をしようと思っても，初等教育時代に習得すべき基礎知識の素養がなければ，どうにもならない場合もあるだろう。だからといって，こうした連中が晩学しても，効果が乏しいからといって，止めてしまえという気はさらさらない。それなりの効果はあるだろう。繰り返すが，何事を始めるにも，遅すぎることはないのである。

ただ，問題はほかにある。結論を先取りすれば，生涯教育をまさに必要とし，それが国民経済にとっても不可欠である対象は，学界，政界，財界を問わず，一流の現役のトップ層であるということである。彼らの大半は，昔，高等教育を受け，法律，経済，技術はむろんのこと，文学，哲学，宗教にも打ち込んだ時期もあったろう。そして，青春を謳歌するとともに，あらゆる可能性に挑戦し，あるいは挫折し，死に直面したこともあったろう。まさにそれは，青春の特権であり，青春の苦悩でもあったともいえる。その後の彼らの人生経験には，こうした体験が貴重な踏み台として機能したことも間違いない。ところで，こうした雰囲気をいつまでも引きずって，いわゆる，「大人」になりきれない書生気質のロマンチストのほとんどは，今日の激しい競争を勝ち抜けず，一流のトップの座にはつけなかったであろう。それなりになるには，そこそこの世俗的な苦労もしなければならなかったろう。そのことには目をつむろう。だが，それからがいけない。こうして，人生競争を勝ち抜き，頭角を現した後の彼らがやっていることがいけない。ペーペーのときは，まだ影響は少ない。それぞれの社会のトップ層ともなれば，その一挙手一投足が世間に与える影響は大きい。その連中がやっていることがなってないのだ。政界は，国会乱闘，財界はバブル経済，教育界も似たようなもの。彼らにも，人間問題を真剣に考え，取り組んだ時期もあったというのに。今，やっていることといったら，人間の皮を被り，仏の顔して，国民を

八つ裂きにして，その生肉を食らっているのだ。直接，手を染めない連中も，その裾分けに預かって，死肉を食っているのだ。なるほど，彼らが表向きやっていることは，一応，もっともらしい。実業界に例を借りれば，最近の経営ブームの尻馬に乗って，やれ，ドラッカー，ガルブレーズとか，トフラーとかの本を取り寄せさせ，従業員の勉強会の先頭を切り，独創性，先見性，個性とかの開発に血道をあげているかに見せかけながら，現実にやっていることといったら，こうした高邁な経営哲学とは裏腹に，例えば，筋の通った指示を部下に与えるどころか，営業成績の数字を見て，ゼロが二つ足らないとハッパをかけるかとみれば，高級料亭かどこかで，泥臭い「ナーナー」談合に明け暮れている始末である。文字通り，「羊頭狗肉」である。ある著名な銀行界のドンがこんなことをのたもうた。日本の三賢人は，田中角栄，渡辺美智雄に浜幸だというのだ。揃いもそろって，「教養に邪魔されず」に名を出したことだけは間違いない。

そうかとみれば，およそ，非人道的，非芸術的な手法のかぎりをつくして，利益を稼ぎまくっておいて，すでにふれたように，そのほんの申し訳程度の金をメセナとか称して，芸能方面に寄付して，宣伝効果を狙うというのでは，どうにもならない。そんなことなら，人道的で，芸術的な手法でやれとまではいわないにしても，せめて，人道的とか，芸術的とかとはおよそ縁の遠いやりかたで稼ぐのだけは，遠慮したらどうだろう。そんなことをいつまでもやっていたら，そのうち，従業員も愛想をつかして，ソッポを向いてしまい，労務管理上，効率が悪いからやめろといっているのではなくて，それ自体が悪だからである。そんな気の抜けた美学を説いたとて，誰もまともに乗ってこない心寒い実情ではある。が，それでも，激流に逆らうミズスマシのような空しい努力にみえても，その淡い努力を続ける以外に手はない。そうだ。現役の一流トップ層の固い頭を洗脳するのは手遅れだとすれば，申し訳ないが，しかるべき時にこの世からお引き取り願って，あの世に行ってもらうしかない。教養とか哲学さらには宗教といったものは，一朝一夕でモノになるものでもないし，一時期どんなに深く打ちこんで，悟りのようなものを開いた気になっても，それで卒業ということはないのである。朝な夕な反芻し，一瞬，一瞬，わが身を打ち叩いて，体得していくものである。そうした人生修行をやらなかった連中は，今更，百年待っても，「河清」にならないのである。では，どうすればよいか。そこに，若い世代に対する教育の役割が登場するのだ。こうなれば，若い世代の成長に期待せざるをえない。が，そうした若木を健全に育てるには，ソフトの面での教育人材とハードの面での教育システムを完備することである。ソフト面については，日経の社説が報じた「全人格的に有為な」学生を養成しうる資格のある「全人格的に有為な」教育者がどれほどいるかということが問題である。若い世代を導くべき教育者こそ，専門はなんであれ，その理想像に一歩でも二歩でも近付くべく日々研鑽すべきであろう。が，そうした人物は，今時，鐘や太鼓を叩いて捜しても見つかりにくい現状である。といって，聖人君子になれといっても，聖書も説くように「人間は不完全である」以上，それは，所詮，無理な注文である。誤まちもあり，見苦しい所業もあろう。ただ開き直ってしまってはならないということである。ましてや，人間性の弱さや醜さを逆手にとるようでは話にもならない。

なるほど，最近の若者はあまり勉強しないが，「ウサンクサイもの」「なにかおかしいもの」をかぎつける鋭い嗅覚は備えている。実世界の「川下」の建前社会の醜さを「川上」の教育界に逆流させることなく，「川上」の清流を「川下」に放流し，徐々にでも浄化していく努力が求められるのである。

▷教育と研究　――天は二物を与えず――

彼も，大学で講義しながら，時々，考える。講義の内容が濃ければ，濃いだけに，薄ければ，薄いだけに，それについていけない者，それに満足しない者，いずれの側をとっても，その講義は迷惑なのである。とはいうものの，では，どこに講義の照準を当てればよいか困ってしまう。マンモス大学ともなれば，一流の能力と意欲をもった者，平均的な能力と意欲，そして，最下層の能力と意欲と，能力格差と勉学意欲格差のバラツキは大きい。しかも，能力と意欲とが必ずしも並行しない。高い能力の学生ほど，大概の講義は，聴けば聴くほど退屈して，次第に講義に出なくなるし，能力もないのに，見当違いに張り切って，オール出席のうえ，冗談でもなんでもノートしてしまう困った学生もいる。三流，四流といわれるマンモス大学でも，一握りの学生は，一流大学のトップ層に引けを取らない学生もいる。なにしろ，ああした試験をクリアしてくるには，失敗は付き物だからだ。ただ，下層大学といわれるところは，最下層の層が厚く，底無しに深いのだ。これも「なにしろ」だが，猫も杓子も大学生の時代だから。中間層の層も厚いが，これが，いわば，浮動票で，どこに焦点を合わせて講義してよいか，皆目，見当がつかないのだ。トップ層はいることはいる程度なのだから，これに合わせた講義をしても，他の連中には，チンプンカンプンなのだから，計算が合わない。となると，いきおい，講義の内容と程度は，底辺層に合わせざるをえない。教師にとっては，楽な商売だが，トップ層はもちろん，中間層も次第に講義に出るのが馬鹿らしくなるし，一番困るのは，出来の悪い学生が自信をもってしまうことだ。それが，彼らの勉学の励みになるなら，それも一つのプラス材料になるのだが，困ったことには，彼らの大半は，大学のレベルはこの程度と高を括って，アルバイトに一層，精を出すのである。

マンモス大学でも，いい大学と評判の付いたところでは，トップ層はそこそこ居るが，かなりレベルの高い中間層が厚いのだ。問題意識も意欲もかなり似通っている。講義の内容もレベルも，この層に的を絞ることができる。この場合は，トップ層も多少我慢して出席して貰わねば困る。それに，なにも講義だけがすべてではない。講義の途中で質問もできる。彼は，できるだけそうした雰囲気になるよう心がけている。講義終了後，教師に直接，談判もできる。ゼミナールという恰好の道場も活用すればよい。こうした機会に，マンネリズムの教師にハッパをかけるのもよい。しかし，彼の大学を始め，こうした教師泣かせの「無作法者」は発生しないようであり，マンネリサラリーマン教師にとっては，有難い風潮となっている。彼の弟がいつかこぼしていた。京大工学部の大学院生，それも，平均レベルの学生に，正誤回答が五十対五十の確率の質問を出

したところ，しばらく考えて，正解したので，その理由を聞くと，「そんなこといわなきゃいきませんか」と怪訝そうな顔をしたという。一事が万事だともいえそうである。

こうした状況のなかで，講義の作成，方法など，考え込めば，考え込むほど，迷路に入り，頭を抱え込んでしまう。彼は，開き直って，こんなことも言ったことがある。「教師になるなら，大学の教師になれ。こんな楽な商売はない。採用のさい，いわゆる，『免状』のような厄介なものが要らないことだ。幼稚園や小学校それに中学校の教師の場合，ふざけた授業をしたりしたら，子供たちには人気があっても，その評判を聞きつけたＰＴＡの怖いオバサンたちが黙っていない。また，高校教師には，上級学校進学というノルマが課されている。大学教師にも，自分のゼミの学生の中から，著名企業などに就職させたいという気負いみたいなものがあるにしても，就職事情と教師の能力とをストレートに結びつける評価基準もないと高言できる逃れ場もある。学業水準の高さと著名企業への就職とは二律背反だと主張している教師も結構多い。また，そうした面もかなりあるから，事は面倒になる。大学教師の評価はとかく簡単ではないのだ」と。あの鉄の宰相，サッチャーがイギリスの斜陽化に活を入れるべく，まず，槍玉に上げたのは，対照的な二つの職業，つまり，石炭労働者と大学教員であったというのも興味深い。両方とも，いわゆる，「生産性」が低いというのだ。ところが，後者の場合，その具体的措置には，実際のところ，手を焼いたということだ。さもありなんと思われる節も多い。

大学教師に要求される二つの条件がある。しかも，この二つがとかく，両立しにくいのだ。学力もないのに，教え方がやたらとうまい教師もいる。表現は悪いが，昔の師範学校の訓練方法は結構うける場合もある。学力がない者は教え方がうまいとはいちがいにいえないが，「天は二物を与えず」の類いで，とかく，立派な教師が立派な研究者を兼ねること，また，その逆も例が少ない。塾の教師が立派な研究者でないとはいわないが，やる気のない子を飽かせず，引っ張っていくコツを身に付けている先生も多い。なにしろ，有名校に進学させなければ，先生がたの生活に直接響くのだ。

湯川博士がノーベル賞を受賞する前だが，中間子理論で売り出した頃，母校の旧制三高で，講演したことがある。彼もこの方面ではズブの素人だが，興味本位で出席した。湯川博士の恩師だったという老物理学教師は，最前席でカブリツキの姿勢で愛弟子の講義を謹聴していた。湯川氏は，ニコニコして，淡々と話を進めるのだが，彼はもちろんのこと，大概の者が怪訝そうな顔をしているのに，博士は一向にお構いないというか，そうした雰囲気に気がついていない様子なのだ。愚考するに，博士のようなこの方面の天才ともなると，凡人の悩みが判らないのだ。峰から峰伝いに，ヒラメキで渦巻いている博士の脳髄には，我々の解らないところが判らないし，それよりも，なぜ解らないのかも判らない。結局のところ，湯川博士は教師としては，失格なのだ。少なくとも，二流，三流のマンモス大学では。

結論は簡単である。教え方だけが上手な教師と研究一筋の教師には，正直のところ，大学からお引き取り願って，それぞれの道，たとえば，前者は塾などへ，後者はその方面の専門の研究所

へお運び願うのが筋ではないか。教育機関，とりわけ，大学というところは，教育と研究の「二足のわらじ」を履くことを要求されるというより，研究の成果を教育にどのように活かすという課題が課せられているのである。学会での輝かしい業績の持ち主も，下手糞な教え方しかできなかったり，レベルの低い「場違いの」大学にいるかぎり，所詮，「宝の持ち腐れ」で，残念ながら，立派な教師とはいえないし，また，なりえないのだ。「教師」たるものは，研究を「隠れ蓑」にはできないわけだ。

研究の「隠れ蓑」について，一言付け加えておきたい。大学でも，特定の分野を，細分化に細分化を重ねて，チマチマやるほど，専門化は深化したとみられがちである。先輩たちが踏み荒らしたり，食い散らかしたりした分野に侵入しようものなら，大変な反撃に遭って，忽ち，追い返されることになる。後輩たるものは，行儀よくさえしておれば，「棲み分け」の理論が通用して，新参者にもそれなりの座が与えられる仕組みになっているのである。できるだけ，他人の手をつけていない分野をコソコソやっておれば，学位の称号にもありつける。

問題は，その研究成果を教育効果にどのように反映させるかにある。少なくとも，充実した教育を求める［実際は，卒業証書さえ貰えばよいというのが本音であるとしても］学生の授業料によって生活を保障され，後顧の憂いなく，研究のみに打ちこむとか，場合によっては，学生たちを実験モデルにして，研究効果をあげるというようなことは大学教師にあってはならない。研究成果は，なんらかの形で，教育効果に還元されねばならないだろう。たしかに，市場性の弱い特殊分野の地味な研究を続ける篤学な研究員のみを抱える研究所では，採算が立たず，立派な研究成果を長期にわたって期待はできないであろう。こうした問題は，市場経済のメカニズムでは対処できず，また，すべきではなく，公共的観点に立った予算措置が講ぜられるべきであろう。こうしたさいの文化的価値基準の位置付けが大問題であることはいうまでもない。

繰り返すが，大学教師は，学生からの経済援助のみによって，なんらかの形ででも教育に還元されない研究のみに明け暮れていてはならない。もちろん，研究成果に，教育効果を短絡的に結びつけることも問題である。私学への国庫助成はこうしたことへの配慮であることも事実であろう。といって，大学教育機関が，独創性，創造性を喪失して，知識の単なる伝達機関に堕してならないことはいうまでもない。そこに，大学教育機関における教育と研究の位置付け，相互の関係が問われている。理念としては，真の教育者は，同時に，真の研究者であるはずであり，その逆もまた成立するはずである。が，現実には，その予定調和が実現しにくいのであり，「天は二物を与えない」のである。

▷ 専門と学際 ——学際なくして，専門はない；専門なくして，学際はない——

現在の大学教育の前期課程，従来の表現を使えば，「教養課程」は，店じまいを強いられている。一言でいえば，役に立たないというのだ。では，なぜ，役に立たないというのかと問い返したくなるが，その質問は当分，そのままにしておいて，では，この教養課程でどんな教育がなさ

れているのかというところから始めよう。手っ取り早くいえば，初・中等教育段階のカリキュラムより品数がやたらと増えたということだけのようだ。体育からなにから，科目数をやたらと取り揃えて，その品名，効能などを覚えさせるだけなのだ。品物を買いに来たお客，つまり，学生たちは，目移りするだけで，その品物をとっくり調べるひまもないし，次から次へと玩具を宛てがわれる幼児のように，十分に飲みこむ前に，飽きがきてしまう。無理もない話だ。教育界では，これではならじと思案投首で，なんとか手直ししてきたが，今のところ，これといった成果が上がっていない。そこで，文部当局を始めとして，大学の教養課程の大改組を試み，名だたる大学でも，「教養学部」とか「教養部」という看板を取はずしつつあるし，そういう看板を使っていない大学でも，カリキュラムの大改組をやりつつある。では，どうするか。簡単にいえば，専門課程に切り替えるのである。たとえば，ある大学の社会学部に例を借りれば，従来，社会学，産業心理学，マスコミュニケーション学それに産業社会学と四専攻あったが，専攻別が決まるのは，三年次になってからで，そのさい，その選んだ専攻に所属している教師が開講しているゼミナールのどれかにも応募できる仕組みになっていた。が，数年前から，これが大改組され，入学時点で，四専攻のいずれかを決めさせて受験させることにしたのである。

ところで，結論的にいえば，社会学部の中の四専攻のいずれかを，大学受験の時点で，あらかじめ，決めておけというのは，どだいおかしい。もちろん，これには，それなりの理由がないわけではない。その大学の現行の社会学部は，よい意味では，「学際学部」ともいえるが，悪くとると，一種の寄り合い世帯で，本流の社会学専攻は別として，他の三専攻は，相互に異質性が強い――もっとも，異質性とはなにかと問い出せば，これも大問題だが――。こうしたことからみれば，社会学部の四専攻は，それぞれ，独立の学部ともいえないこともない。

ところで，立場を変えて，学生側からみれば，工学部を受験した学生が，翌日，同じ大学の文学部を受験する御時世である。「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる」の類いである。大学側も，学生の資質や好みよりも，ともかく，特定の学部に席を置かせて，専攻科目を専門的に勉強しているんだと，学生を一応その気にさせておこうという親心で，対処しているのである。色気のついた子供に，異性を得心のいくまで研究させるよう，野放しにしておけば，「蝶よ花よ」と青春を渡り歩き，挙句の果ては，異性の実態や本質を見抜くまでに，疲れ切ってしまい，虻蜂取らずになるのが落ちである。とすれば，早いうちから，男性か女性のうちから一人，夫か妻とかいう形で特化して，宛てがってやるほうがよいのではないか。

子供は子供で，その宛てがわれた夫や妻［もちろん，その宛てがわれた夫や妻が本人が選んだ恋人であったなら，なおさらであるが］を通じて，異性の本質に迫れるのではないかといった配慮もある。先ほどの玩具の話ではないが，あれこれ玩具を宛てがうより，これという玩具を特定して宛てがい，子供にじっくり味わわせ，玩具そのものの面白さやなんかを覚えさせることのほうがよいのではないかというわけである。

言い忘れたが，この大学では，もう一つの理由があった。従来のやりかたでは，入学以来，マ

スコミ学専攻の華やかさを目にしてきた学生たちは，三年次になって，そこに応募者が集中しすぎたため，その調整が面倒でもあった。が，改定後は，その片寄りが少なくなった。もっとも，三年次で，成績その他で，希望以外の専攻に回されると，文句の一つも言えるが，入学試験に合格したものの，希望した専攻以外に回されることになった場合，「入学しません」というものはほとんどいないということもあり，大学当局にとって都合がよくなったことも事実である。

ところで，そもそも，十八歳やそこらの高校卒の段階で，自然科学系，社会科学系，人文科学系のいずれかを選ばせることにも多分に問題もある。

彼らは，科目を好き嫌いしたり，得意課目にしたり，苦手科目にするかは，彼らの素質とは直接の関係がないことが多い。また，潜在能力が仮眠していることもざらにある。まだ，自分の能力の可能性に十分チャレンジしてない経験不足の状態で，特定科目，それもかなりの程度にまで細分化したものを選ばせるのは，本人が本気で，真剣であればあるほど，酷な話ではある。たとえば，社会科学系を選んだことは，まあ，それだけの理由があったとして目をつむるとしても，法学部もあれば，経済学部もあるのに，わざわざ，社会学部を選ぶこと自体，その理由を聞いても，まともな答えを期待するのはむつかしい。ましてや，その社会学の中の四専攻のどれか一つをきめて受験せよというのは，どだい無理な話である。

ここで，一言いっておきたいことがある。専門分野が細分化されていくほど，それぞれの分野の異質性が強まることも事実である。そうして，自分の専門分野を極めるのと反比例して，他の分野とは疎遠となり，音痴になっていく者が多い。こういう連中は，いわゆる，「専門バカ」といわれる人種であり，学者の大半は，この部類に属する。自分の分野こそ，金科玉条とばかり，その縄張りに固執し，著名な海外文献の引用を濫発し，本体を溺死させてしまうほど，「引用文に没落し」，自分の本陣を土足で踏み込まれるといった危機感でもあると，「テニオハ」の助詞的文言にケチをつけてまでして，撃退するという「アサマシサ」である。専門バカの対極に，いわゆる，「学際派」がある。

ある者は，山の裾野を，登山口ばかり回っている。つまり，あれこれ半齧りばかりして，一応，なにもかも心得顔で，自得したつもりになっている。彼らは，学問の裾野をグルグル回っているだけなのだから，一合目か二合目にも行き着かないまでに終わってしまう。だのに，山頂を極めたような気になって，極意を伝授されたかのように得意顔で，そこから眺める視野を，さも，全宇宙を達観したと錯覚している馬鹿も結構いるものだ。ところが，二合目，三合目と登っていくうちに，足を踏み外したり，濃霧に巻かれて，五里霧中に，山中をさ迷っているうちに，本道から外れてしまい，やむをえず，下山する者もあれば，気が付いてみると，別の登山道に踏み込んで，専門分野を変えてしまい，そのまま，山頂を極めた幸運児もたまには出てくることもある。

さて，それぞれの専門分野の登山道を辿っているうちに，五合目，六合目と山頂に近ずくにつれ，急坂となり，登攀の困難さは想像を絶する。それに，山塊は，鋭く，狭くなっていき，他の

登山道とは，物理的にも近接していき，場合によっては，接合することもある。つまり，それぞれの専門分野はお互い，ボーダレスになっていき，学際的視野が拓けることになる。もっと言えば，そこから山頂に近ずくにつれ，その登山道は，他専攻や異専攻が相互に交錯した複雑極まる隘路となり，最初の登山口から登ってきた登山道での登攀技術では，間に合わず，他専攻や異専攻をも統合した新技術——たんに各専門技術を網羅することではない——が要請され，学際的視野が展開されることになる。最近，学際的研究が強調されるようだが，それは，素人の初心者が，最初から，いろいろの専門分野をあれこれ渡り歩き，どれもこれも，初歩の段階を一歩も出ないのとは訳が違うので，それぞれの専門分野をそれなりに極めた段階で，初めて，他専攻の技法を必要とし，また，その技法の習得も可能となってもいくものである。

結論を急ごう。社会科学のそれぞれの専門分野を辿る登山道を登る技法は，それぞれが具有する特殊技法を習得することはむろんのこと，どの登山道にも必要とされる共通技法がある。その基本技法を習得する場は，感性を扱う文学や芸術，知性，理性に関しては，哲学，心性に関しては，宗教というように，いわば，人文科学の分野こそ，人間性の深奥に迫る分野なのである。また，工学の基礎科学ともいうべき理学と社会科学の根底をなす人文科学とは，ある意味で，接点を結ぶのである。

大分昔の話になるが，文芸春秋かどこかで，世界的な数学者で，とかく奇行の多かった岡潔と仏文学者で，「言葉の神様」ともいわれた小林秀雄との対談を特集したことがあった。どれほどのリハーサルがされたかは，さだかでないが，ともかく，お互い，自分たちの専門用語は使わないし，べつに，相手に分からせようと努力している節もない。しかも，お互い，自分たちの専門的な領域のことにふれているのだが，言われぬ先から，相手のいわんとすることが分かってしまっているのだ。ああいうのが，ア・ウンの呼吸というのであろう。彼らは，極端にいえば，お互い，わざわざ，喋らなくてもよいのだ。あちらは，お茶を啜っていてもよいし，こちらは，ワイングラスを傾けていてもよいのである。コムニケーションのテレパシーはいやというほど通じているのだ。空気はピーンと張りつめている。座は白けることはないのだ。ところが，大概の者は，こうした名人芸の真似は到底できまい。

たしかに，戦後の大学前期課程，つまり，教養課程も，こうした観点に立って，お膳立てされて出発したものではあった。が，すでにふれたように，細切れのカリキュラムを小間物のように並べて，大道商人のように切り売りするのでは，「教え方」がうまいといっても，せいぜい，昔の師範学校の熟練教師か，塾の「金ピカ先生」のような流儀が大部分であって，「人間性」を解せず，また，解しようともせず，いうところの「教養」，つまり，“エスプリ”も著しく欠落しているのである。こうした教師が，それに類した「金太郎飴」を大量に再生産している状態では，その大手術が叫ばれるのもうべなるかなといわざるをえないのである。

それには，「教養課程が役に立たない」といっても，一体，「教養」とはどういうものをいうのか，「役に立たない」といっても，何の役に立たないといっているのかなどを再考，三思し，た

だ，カルキュラムや制度を「朝令暮改」するだけでなく，日時をかけて，こうした本質的な問題にじっくり取り組まねばならない。

人文科学を踏まえず，いたずらに，法律や経済のテクニカルタームに拘る社会科学がお粗末であることはいうまでもない。人間性の内奥の謎や矛盾に全く無頓着に，ただひたすら，六法全書に齧りつき，司法試験に優秀な成績で合格して弁護士名簿に登録され，有名事件を手がけ，法律条項を縦横に駆使して，快刀乱麻の切れ味を見せても，名探偵といわれ，死臭を嗅げつけるハイエナのように，迷宮入りかにみえた犯罪を見事に処理したとしても，その事件の背後で，これに関わったすべての者に，物心ともに，後遺症を全く残さず，文字通り，「一件落着」させたかどうかははなはだ疑問である。人間問題の解明は，刺身包丁で魚をさばくようなわけにはいかないのである。その切れ味が部分的に鋭ければ鋭いほど，その外科手術の後遺症は深いのである。まことに，キリストや釈迦のお手並みを拝見したいものである。もっとも，彼らの裁きは，おそらく，現代人にとっては，得体の知れない，ホップのきかないビールのように，気の抜けたものとして映るであろうが，それでよいのである。

感性，理性，心性などの表層的現象を対象とするのが社会科学の分野であり，人文科学こそ，それらの深層に迫るもので，社会科学の基礎的部門ということができる。また，この基礎的素養なくしては，専門部門間の学際化も困難であろう。また，専門化が深化していくほど，部門間を繋ぐブリッジとしての人文科学もいよいよ高度化を要求されるであろう。

自然科学の分野でも，ファジー理論やカオス理論がまかり通る時代である。社会科学の専門分野がプラチナのような冷徹な理性だけで処理できるはずもなく，煮えたぎる感性で血を通わせ，神秘的な心性で魂を通わせることが必要ではないか。

専門用語や専門技術でゴテゴテ厚化粧して，壮大なゴチック様式の建造物を構築しても，それは，人気もない空疎なゴーストパレスであり，まさに，幻の「バベルの塔」になり終わるであろう。最後にもう一度，繰り返すが，学際化とは，あらゆる専門分野の専門用語や専門技術を網羅的にマスターすることではないことを重ねて銘記すべきである。

▷ 思想と宗教 ——社会主義思想は死んではならないが，それだけでは幸せにつながらない——

あれだけ厚く見えたベルリンの鉄の壁も脆くも打ち砕かれ，ソ連邦の崩壊は，あっという間もない，あまりにも呆気ない幕切れだった。何故なのだろう。

社会主義を一言でいえば，社会的公正——少なくとも，物質的，経済的なものに限られるが——という壮大な夢を実現するためのきわどい思想の実験であったことだけは間違いない。ただし，その実現のためには，人間の原罪ともいうべき物質的，経済的私利・私欲を克服しうるという信念というよりは，むしろ，信仰ともいうべきものを前提にしなければならなかった。しかし，実は，この物質的，経済的私利・私欲の根源とみられる肉的欲望は，自愛，自存，その反面，排

他の形をとって，人類の闘争史に血みどろの足跡を残してきた。そうして，残念ながら，現在に至るまで，いかなる宗教も哲学も，こうした問題を克服するどころか，解決の糸口すら摑んでいない。そうしたなかにあって，それでも，現在，先進国といわれる国々は，ルネッサンスや工業化といった近代化を経て，民衆の隅々にまで，自由，平等それに合理化といったものの意味を浸透させることに成功した。むろん，そうしたことを通じて，「真の」平和や平等の世界が実現したわけではない。が，少なくとも，自他の間で，駆け引き，取り引き，妥協といった手段を通じて，相対的な意味での平和や自由，平等を築く知恵をある程度，民衆の一人一人に学ばせることができた。

つまり，これらの国々は，物質や経済財を生産し，配分，調整する手段として，資本主義を選んだ。ところで，初期資本主義の論理は，人類の物質的，経済的私利・私欲を無視するのではなく，むしろ，正面に据え，こうした欲望を個々的に追求しても，「見えざる神の手に導かれて」（アダム・スミス），自由競争というか，完全競争が促進され，個々の欲望を実現すべく勤勉に良質で低廉な品物を作り，生産者は薄利多売で利益を得，消費者は充実した生活をエンジョイでき，こうして，公益が実現されるとしたのである。もちろん，現実はそう生易しいものではなかった。つまり，人間の原罪を無条件に矯正しようとしても，それは，余りにも根の深いものであったし，また，だからといって，際限なく，野放しにしても，それは「強者の論理」にほかならず，「弱肉強食」の世界を助長するだけであった。彼らは，そうしたことを近代化の過程で，いやというほど経験させられ，その挙句の果て，先に述べたように，相対的な意味での自由，平等，平和といった知恵を学んだのである。そうして，彼らは，労働の動機付けとして，私利・私欲を公認するとともに，種々の交通整理の手段を講じたのである。それは，修正資本主義や福祉国家などの形をとりつつ，現在にいたっていることは，周知の事実である。

こうした努力と悲願とにもかかわらず，物質的にすら，「社会的公正」を達成するどころか，富を偏在させ，貧富の差を広げるにとどまるにすぎないとみられる資本主義は，どのように軌道修正しても，化粧直ししても，所詮，どうにもならない。その諸悪の根源は，一言でいえば，「私有財産制」にあるからとみて，とりわけ，生産手段の私有を廃し，いわゆる，「剰余価値」そのものであるとみられる利潤の存在を否定すべく，社会主義が誕生したのである。

その実践的第一弾は，マルクスを思想的始祖に，「資本論」を「経典」として，レーニンという巨大な救世主が，ツアーリズムという超反動的な政治体制の圧政のもとに呻吟していた純朴なロシア民衆を救出しようとしたのである。続いて，歴代の専制君主の支配下に疲弊しきっていた中国の大群衆も，列強に侵食され，日本軍の大陸侵攻をもって，頂点に達し，毛沢東による「社会主義化」を許すに至るのである。偶然というよりは，むしろ，必然的というべきだが，こうした思想はマルクスの誕生地であるドイツでは育たず，寄りにもよって，両大国とも，いわゆる，「ルネッサンス」の洗礼も受けず，資本主義の初歩的種子も芽生えなかった国だったのであり，こうした国が「社会主義化」の実験地として選ばれたのである。こうした国民は，むろん，資本

主義機構の矛盾も知らず，ましてや，高度資本主義や独占資本主義に汚染された経験も持たない。ただただ，貧困であった。ともかくも，飢えから逃れたかった。マルクスの経典の中味なんかどうでもよかった。思想的にも，教養的にも蒙昧な大群衆は，人間の原罪の自覚もなかったし，その克服が容易でないという認識もむろんなかったので，希有な集人力，人心収攬術と指導力とを備えたリーダーのプロパガンダに乗せられたのも見易いことであった。

面白いことに，ロシアにも中国にも，キリスト教や仏教のような魂を扱うことを目的とする宗教は，それほど普及していなかった。仏教を日本に伝えた中国には，その発祥の地であるインドとは異なり，儒教のような実践哲学というか，処世術のようなものが盛んであった。こうした宗教的に不毛に近い地の人々は，マルクス理論も経済学とか経済哲学としてではなくて，あたかも，魂を救う宗教と錯覚して，鵜呑みに受け入れたのである。

彼らは，勤勉哲学の宗教的土壌（マックス・ウェーバー）を欠いていたし，近代的合理化の初歩的技法も弁えなかったため，人間の幸福の下部構造を支えるべき物質的条件を整えることも満足にできなかった。そのうえ，指導，調整，統制の任に当たる一団の官僚軍団は，自分たちの支配欲的エゴにも気付こうともせず，人間の叡知を過信し，または，期待しすぎ，結果的には，人心収攬に失敗し，民衆の勤労意欲を殺ぎ，果ては，地上の楽園への夢をも褪せさせていくのである。いな，むしろ，社会主義の思想は，「性悪説」の立場にたって，人間の動物的，物質的エゴを規制し，統制し，物質的，経済的に，「社会的公正」を実現させようとするものと理解したほうがよさそうである。しかし，低い生産力から結果する乏しい富のパイが独占的な国家機構や一握りの特権的な支配政党や官僚に偏在したのであれば，こうした目標は，所詮，達成されうべくもなかったのである。彼らは，貧困から，飢えからさえ脱却できなかったのである。「下からの革命」——この場合の「革命」とは，現行社会主義体制からの解放をいうが——には，民衆は，物質的，精神的エネルギーを欠いていたし，然るべき指導者も持たなかった。ただ，ソ連邦の場合，現機構の最高権力者自らが現行社会主義機構の虚構を暴き，資本主義諸国に急速に接近したのである。かくてソ連邦は解体した。中国は，「天安門」事件という不吉な後遺症を残して，民主化運動は，不発に終わった。

さて，ソ連邦ならびに東欧諸国は，民主化，資本主義化を移植され，洗脳化されつつあるが，大部分の国は，十分な受入れ条件を欠いている現状である。

たとえ，資本主義思想の輸血や内臓移植の効果が現れるとしても，なお，かなりの期日を要するであろうし，その拒絶反応も十分警戒しなければならないだろう。

他方，資本主義国側も，途轍もないほど大きい落とし物をしたのである。この激しい資本主義競争のもと，「強者の論理」が堂々と罷り通るような手放しの「レッセフェール」では，弱者と強者，貧者と富者との格差は拡大し続け，その調整はきかなくなり，いずれ，資本主義機構そのものが空中分解したであろう。その反面教師の役割を演じたのが，ほかならぬ社会主義機構であったのだ。そして，心ある者は，山の彼方に幸い住む国を夢想し，そのユートピアの建設を社会

主義の機能に託し，ロシアや中国のような大地に咲いた「社会主義」の大輪の花を仰いで，随喜の涙をこぼしたのである。その夢の国の一つが消えたのである。民主化，自由化，資本主義化といっても，なんのことはない，結局のところ，弱肉強食の世界へと逆もどりして，「元の木阿弥」になったのである。

こうして，このきわどい思想の実験は，見事に失敗した。では，いわゆる，「社会主義化」を，先進諸国，たとえば，イギリスやフランスに移植する実験の場合はどうだったか。その試みは幾度もなされたが，成功しなかった。物質的，経済的に，「社会的公正」を実現する主体がプロレタリアートであったり，階級闘争を通じて，彼らが必ず勝利するという単純な構図も幼稚にすぎるとして，一笑に付する者も多かった。とりわけ，「社会的公正」を，物質的，経済的な枠内に限定したことが問題である。ルネッサンスやヒューマニズムの洗礼を受けた先進資本主義国民は人間性の深奥に，神秘的なもの，醜悪なもの，相互に矛盾したもの，不可解なものなどが共存したカオスを覗き見ていたのである。「社会的公正」といっても，物質的・経済的なものだけの「公正化」では十分でないことを「百も承知」だったのである。なるほど，工業化や合理化による「産業革命」は，物質的，経済的富を豊富に蓄積した——むろん，「相対的窮乏化」は進行したが——。他方，富の選択肢も多様化し，多元化し，非物質的，非経済的な財，たとえば，「余暇財」や「ユトリ」といったものにまで広がっていった。たしかに，マルクスの「資本論」は，その当時の資本主義機構の矛盾を鋭く指摘したが，その克服の対象を絞りすげ，その解決のための処方箋も，あまりにも，公式論的に単純，明快にしすぎるきらいがあった。深い教養を積んだ民衆には，物質的，経済的な「公正化」だけでは満足しなかったし，そうした方法では，こうしたことの実現すらおぼつかないことを熟知していたのである。

つまり，「社会的公正」とはいっても，人間の先天的な美醜の問題，健康の問題，才能の問題，これらの平等化はどのように実現されうるのか。個人の努力だけではどうにもならない先天的な資質の差を，物質的，経済的な問題だけで処理できるはずがない。こうして先天的に差別されているのに，物質的，経済的なものだけを平等化されたのではたまらない。せめて，こうしたもので埋め合わせたい，いや，せめて，憂さを晴らしたいという考えも出てくるわけである。美男や美女に大金持ちはいないものである。もし，おれば，我々の「正義」が許さない—とはいっても多少の「ヤッカミ」もあるが—「二重取り」だからである。しかし，現実には，こうした「二重取り」の連中が結構いるのである。美女であるばっかりに，大金持ちに嫁ぐこともあるし，才能を悪用して，巨万の富を築くこともある。かとみると，反対に，才能がないばかりに，ヘマばかりして，貧乏暮らししている者がゴマンといるご時世である。こうした先天的にハンデのある者には，せめて，物質的なものぐらい平等にしてやろうという発想も出てくるわけである。周知のように，資本主義下の「資本」は，独り歩きをはじめ，貧富の差は拡大していっているのも事実である。しかし，原点に帰って，先天的な属性や後天的な属性を含めて，そもそも，「公正」とは，どういう概念だろうか。「社会的」公正という以上，社会制度下の公正ということに限定する

とすれば，先天的な属性の公正にまでは，立ち至っていないとみることができる。しかし，真の平等とか公正といった概念は，こうした属性をも含んだものを意味していることは間違いない。とすれば，もはや，経済学の範疇では処理できず，哲学的価値観が求められるし，その解決となると，宗教の境地を必要とするであろう。いみじくも，バイブルは，「人はパンのみにて生きるにあらず」といっているではないか。

いや，マルクス理論は，経済学を越えており，イデオロギーや思想の領域に入り込み，いわば，「経済哲学」ともいえるものではあるが，魂とか心とかを扱う宗教とは無縁であり，神とか愛とかいった概念は苦手というよりは禁句でさえある。しかし，真の公正や平等に言及する場合，神や愛の問題に触れざるをえないと思われる。老若男女別はむろんのこと，顔，形がどれほど似ていても，「瓜二つ」はないといわれるように，性格，価値観さらには本能的欲求，たとえば，食欲や性欲でさえ，全く同一である人間は二人といないのである。各人は各人独自の特性をもっており，それは，それ自体として独立した価値をもつ「個性」と呼ばれるものであり，なにか絶対的というか，至高なものを，かりに，「神」と呼べば，その目からみれば，どの個性も平等であり，相互に全く遜色のないものとみることができるのである。このように，各個性が神の前で平等であるということは，神の愛が「等し並み」に注がれているとみることもできる。それぞれの個性を，それぞれに予兆された課題に沿って，生涯をかけて開発していくことこそ各人の「幸せ」につながる道ではないか。

にもかかわらず，我々凡人は，自分達に与えられた天与の特性を軽視し，「他人の花は赤い」式の「無いものねだり」をする通弊がある。世俗的な属性で，最高と見られるもの全て――美，富，健康など――を一身に集めることは，いってみれば，鼻はクレオパトラ，目はエリザベス・テーラーとトップ級の部品を取り揃えても，モンスター以外の何ものでもないように，さしずめ，神の目からみれば，天に唾する背徳者であろう。神が与えたものに満足せず，飽く事なく願望することは，あたかも，神に背いて，天に届くべく，「バベル」の塔を築き，神の不興を買ったニムロデの所業に等しいものといえるであろう。